「平泉史学における人間存在―歴史を貫く冥々の力―」要旨

皇學館大学大学院神道学専攻前期課程一年　谷口　太一

本稿は、大正から昭和にかけて神道界・学界に影響力を保持し続けた元東京帝国大学国史学科教授・平泉澄博士の構築した「平泉史学」における人間存在について述べたものである。

まず、平泉氏が学生時代を過ごし、大学院修了後は勤務先でもあった東京帝国大学の国史学科において展開した実証的史学、所謂「官学アカデミズム」について述べた。

次いで、平泉氏の用いる「歴史」の語義について考察し、それを認識する「人間」について今日、我々が日常用いるような意味合いにおいてではなく、それが狭義の意味合いにおいて―畢竟、人間存在は自明として存在しない―述べられていることを確認した。

また、この際に問題となる「あるべき人格」―カントがその倫理哲学において抱えた問題と同様に―について、人格の生成要因であると思われる「歴史を貫く冥々の力」と合わせて考察を加え、平泉氏自ら述べるところである「歴史と哲学の融合」の視角から考察を試みた。

その結果として、平泉史学における人間存在の在り方は、少なくとも初期の段階にいては、田中卓氏の述べるように、厳格な人格主義を有することが確認された。また、「歴史を貫く冥々の力」の意味内容が、歴史的存在たる「人格」が直接の関係も関節の関係もなくある時復活し、その理想を同じくして在り、そしてまた新たな人格を形成し、その復活は歴史において絶えることが無かったということであるということを明らかにした。

しかし、平泉史学における人間存在が常に、近世における人格主義の代表格であり、かつ大正教養主義においてよく参照されもしたカントの倫理哲学における人間存在のように、常に人間であることを命ぜられ続ける「ぎりぎりの」存在であるかどうかは本稿において述べることが出来なかった。これについては、他日を期したく思う。